

# 九州西部方言の形容語

——カ語尾形容詞を中心に——

神 部 宏 泰

## はじめに

九州西部方言にあっては、「シロカ」(白い)「クロカ」(黒い)などの、いわゆるカ語尾形容詞が一般的であつて注目される。このカ語尾形容詞の分布領域および表現性などについては、すでに、早く、吉町義雄氏のご研究(『九州語用言活用分布相要領並補遺』(『国語学』第八輯)があり、また、『九州方言の基礎的研究』(九州方言学会編・昭四四・風間書房)でも、秋山正次・上村孝二・鏡味明克・瀬戸口俊治の各氏をはじめ、諸氏によって、主として語彙面からこの問題がとりあげられている。筆者も、同書において、九州全域に分布する形容詞・形容動詞について概観した(二七一頁)。

このカ語尾形容詞の存立については、細部にわたれば、なお、いくらかの問題が指摘される。本稿では、従来の研究成果をふまえて、その存立の地盤・作用等について討究することにした。

## 一

カ語尾形容詞が、形容詞の「カリ活用」に由来するものであることは、周知のとおりである。当域では、「カリ活用」終止・連体形の語尾の「る」が、いまだに観察されることがある。例えば鹿児島

鳥巢北西部、阿久根の、

○イッゴン ナカイギ、

行きたくないのなら、…………。

に見られる、「ナカイ」(無かる)、天草電ヶ岳の、

○トーカー ワナ。

遠いよね。《老女が唄の場所を説明して》

に見られる「トーカー」(遠かる)は、いずれも「る」語尾の残存

例とされよう。熊本市域でも、

○タイガイ キツカル ネー。

そうとうきついねえ。

のような一例を得ている。

カ語尾形容詞にかかわる、各活用形の用例を、当域の要地と目される天草の下島方言からとりあげよう。

○ヒルナラ ヨカバツテ モー イマゴロワ ユーメシ タクデ

インガンシカ。

昼ならいいけれど、もう今時は夕飯をたくので忙しいよ。

《老女が夕方の訪問者に》

○モット ワツカレバ ヨカバツテ。

もっと若ければいいけれど。

○トチワ ヒロカッタ モネー。

土地は広がったものねえ。

○オキヤ スズシカロー ター。

沖は涼しかろうよ。《老女が海岸で涼を求めながら》

このようにあって、「カリ活用」にかかわる活用形が、よく活動している。一方に、

○ウモー ナカ。 おいしくない。

のように、いわゆる連用表現におこなわれる、本来の形式（「ク・シク活用」の連用ウ音使形）が相補的に採用されている。

「無い」にかかわる假定表現形式——假定形は、やや複雑である。

○トモダチノ ユー ナカランバ、

友だちがよくなければ、……………。

のように、「ナカランバ」が一般的であるが、「ナケニヤ」「ナケラニヤ」も併存している。

## 二

カ語尾形容詞の分布を地図化したものとしては、早く、吉町義雄氏の「形容詞カイ語尾地域別図」（『国語学』八輯・六五頁）がある。また、「九州方言の基礎的研究」でも、「好い」についての、老年層の分布図がとりあげられている（一六一頁）。その分布領域は、概して筑前西半から薩摩・大隅へかけての、西部一帯ということができよう。が、この領域にも、事象により地域によって濃淡があり、一様でない。肥筑地方では、このカ語尾形が特に優勢であり、南下するに従って弱まる。大隅地方は、カ語尾形も存するが、おおむね

イ語尾形容詞の勢力下にある。

注意されるのは、「好力」「無力」の二語は、特に生命力が強く、

その分布領域も、他のカ語尾形容詞の分布領域を越えている点である。薩摩・大隅地方でも、この語は優勢のようである。主としてイ語尾形容詞のおこなわれる宮崎県下にもこれがあるようで、若木実

氏は、「ヨカに限り、かつその連体法のみ、東諸県郡や宮崎郡・市でも広く使われている。」（『九州方言の基礎的研究』二五一頁）と述べていられる。この事態については、別に、項を改めて考察したい。肥筑域内でも、これらの語は、優位を保っている。

さて、カ語尾形容詞が、今日、上述のとおり、九州西部、とりわけ肥筑地方に、色濃い分布を見せるのは、看過しがたい重要な事実である。これを、根の深い、基質的なものにかかわったこととする

のは、必ずしも不当ではない。肥筑方言は、周知のごとく、特異な方言であって、筆者も、その存立を支える根底的なものに、かね

てから関心を寄せてきた。

藤原与一先生は、方言の「基質」について、次のように述べていら

れる。

分布には、総じて、根底があり、一分布も、何らかの本質的なものとのつながりを示そうとする。本質的なものとは、その地域に

あって、そのような分布を傾向づける根底的基質的なものである。じつは、これによって、方言という分派、まとまりは、形成される。『方言学』へ昭三七・三省堂 二四四頁

方言の個性——特質を根底にあって醸成する基質的なものは、たしかに存在するとみられる。が、その実体を明らかにすることは、か

なり困難である。筆者は、かつて、「方言基質論序説——九州方言の基質について——」（佐賀大学教育学部研究論文集第二七集・昭五四）において、九州方言の基質について論究したことがある。その小論において、当方言の基質の一つとして「体言化傾向」あるいは「体言性」をとりあげた。文表現の要所を体言化する、特殊な表現法である（藤原与一先生の「体言化表現法」〔方言と文法〕・『日本文法講座Ⅰ』所収）のお考えに示唆を得ている。用言性の強い日本語にあって、この傾向が顕著なのは、注目に値いしよう。

○イカジャコテ。

行かないことがあるか。行くとも。

○バカンゴツ。

ばかなことを。ばかげたことを言うな。

熊本の例であるが、このような特色のある表現が目だつのも、問題の体言化傾向に支えられた事実として受けとることができよう。例の、特異な文末詞「バイ」「タイ」の存立、主格助詞「ノ」の盛行なども、このような基質に支えられてのこととすることができよう。

さて、カ語尾形容詞が、当域に分布し、優勢であるのも、この体言性の基質に基づいてのことと想察される。「暑カ」「寒カ」の「カ」は、この形式が作用して、体言的な性格を帯びることになったのではないか。すなわち「しイ」と比較してみても明らかかなように、カ語尾には、発音上、「カ」を含む安定のよさがある。この「カ」の台に収約されて、一語は、表現内容の提示に重点の認められる、体言的な性格を有するようになったかと考えられるのである。この事態は、接尾辞「サ」をとる、「嬉シサ」「悲シサ」などの場合にも比

肩せられよう。その意味では、「カ」も、接尾辞的な性格を保有しているとも言えるのである。

○オバッチャン。スコシ。ヌルッカ。

おばあちゃん。少しぬるいよ。〔風呂に入った小学生女が〕

○キョーワ。ヒノ。ワルカ。

今日は日が悪いよ。

熊本市の例である。これらの例文では、末尾の「カ」が卓立し、顕著な訴えかけを表している。このような訴えかけの機能が發揮されるのも、上述の「カ」の、接尾辞的特性にかかわっている。

文の末尾を体言でしめくくる、いわゆる体言性の表現は、表現内容に対する話し手の判断・確認よりも、末尾の体言で一文を統轄、これをそのまま相手にもちかけて、訴えかけ呼びかけを果たすところに特色がある。体言的な機能を帯びた「カ」も、末尾に立つては、一文を統轄して、訴え性の認められる、特殊な表現性になうことになったかと考えられる。このようなカ語尾形容詞の存立を支えたのは、当方言の基質と目される、「体言化傾向」ではないか。体言性の基質が根底にあって醸成される、特殊な土壌に育まれて、カ語尾形容詞も、安定した展開をとることができたかと想察されるのである。

### III

カ語尾形容詞のうち、「ヨカ」（好い）「ナカ」（無い）の二語が、他の形容詞の分布領域を越えて、かなりの広域に分布している事態については、すでに述べた。先に、宮崎・鹿児島県下の状況につい

て、いささかふれるところがあつたが、福岡県下についても、岡野信子氏は、「東北域はイ語尾、西南域はカ語尾であるが、西南域中にはカ・イ併用地域もあり、ヨカ・ナカ二語に限っては、カ語尾域に接した東北域中にも用いられるという状況である。」（『九州方言の基礎的研究』二〇五頁）と述べていられる。このように、「ヨカ」「ナカ」の二語が、カ語尾形容詞のなかで、特別な生きかたをしてゐる点が注目される。

「好い」「無い」は、一方に、辞的な性格を、いっそう強く兼ね備えていと言へるのではないか。すなわち、「好い」は肯定的許容的な判断を、「無い」は否定的否認的な判断を表す。これが、「カ」の台にのれば、その音相と作用とに基づき特定化——体言化によって、機能はいっそう拡充され、動的なものになる。

○アイガ イチパン ヨカ。コキャントモ シジュエント ナオル。

あれへアロエがいちばんいいさ。こんなのもしぜんになおる。《傷のあとを見せながら》

○ココデ ミテ ヨカ。ココデー。  
ここで見ていいぞ。ここ。

天草下島での実例である。このように、末尾を「ヨカ」で統轄された文は、上述のとおり、肯定的あるいは許容的な判断表出が顕著であつて、一文は、これによって特色づけられている。しかも、この語の体言性も明らかで、ここには、情意のまさった、相手への訴えかけが、内質として認められる。

○アゲン タノシミヤ モー ナカ。

あんな楽しみはもうないよ。《老女が昔の芝居見物を回想して》

○オラ イッチヨシ イコーゴタ ナカ。

おれは少しも行きたくないよ。

これも、天草下島での実例である。このように末尾を「ナカ」で統轄された文には、上述のとおり、否定的な強い判断表出と、ここに備わるしぜんの、相手への訴えかけ性とが、明らかに看取される。カ語尾形容詞にあつて、「ヨカ」「ナカ」の二語が、他にまさる生命力を保持しているのも、このような辞的性格が、一方に強く認められるが故に外ならない。さらに言えば、日常の言語生活にあつての、

この二語の、高い出現頻度である。例えば、佐賀県武雄市東川登町での一時間の会話（話者・森忠蔵〈明治四四年生〉下村シゲ〈明治三五年生〉。話題・昔の農業。昭五三年）で、「ヨカ」二五回、「ナカ」二九回、両者合算すれば、全形容詞延べ語数の三分の一を占めている。このような状況であれば、両者の示す特別な活動力が理解されよう。二音節の安定のよさも、何ほどかあらずかたていようか。さて、佐賀県東部には、「ナカ」に関する、注目すべき用法がある。神埼の実例を掲げよう。

○アンシタ イキンナカ。

あの人は行かれないよ。

この「イキンナカ」がそれである。「キンナカ」（来られない）「イナカ」（買われない）のようにあつて、日常、頻用される。「イキンナカ」は、「行キナナカ」である。意義面では「行カン」に相当する。が、「行カン」よりもやややていねいな言いかたであつて、

土地人も、話者に関して用いないと内省する。(話し手に関して用いられるのは、主として「行カン」である。)このような、特異な語がおこなわれるのも、「ナカ」の盛行の故ではないか。いわば、「ナカ」の台にのせて作られた、動詞の否定形式である。「ナカ」に休言性が認められるだけに、この語法は、いくらか客体的である。ここに、敬意の宿るゆえんがある。

○オイナカ。オイナカ。

おられない。おられない。《聞き手の探している人の席が  
いているのを見て》

佐賀市での実例である。これをまた、

○ヂーサンナ。オイノ。ナカ。

おじいさんはおられないよ。

のように「ノナカ」と言うこともあって、この形式の語法は盛んである。

この「ノナカ」は、さらに、「イキンサンナカ」(行きなさらない)「キンサンナカ」(米なさらない)などのように、敬語の接した動詞をも包括する。「イキンサンナカ」は、「行キナ(ン)サリナカ」のように分析される。これは、意義面では、一方に存立する「行キンサラン」に対応する。「ノナカ」が、いっそう改まった言いかたであることは、先にもふれたとおりである。「行キンサンナカ」は「行キンサナカ」のように縮約してもおこなわれる。

○イキナンナカ。テッチャン。

行かれないんだって。

神埼での一例である。これは「行キナリナナカ」であって、ここに

は敬語「ナル」の連用形がおこなわれている。

○姑さんが。ネナナカギ。ネラレンシ、

……………寝られないと寝ることができないし、……………。《老女が昔の嫁の生活を語る》

佐賀市での実例である。これも、一方に「寝ナランギ」とあるのに対応するが、「ノナカ」の方が高い敬意を表している。

以上のような注目すべき語法が見られるのも、「ナカ」の、特異な機能と、その活動力によるものと考えられる。

総じて、「ヨカ」「ナカ」の生命力は根強い。

#### 四

カ語尾形容詞のおこなわれる地域では、いわゆる形容動詞もカ語尾をとることが多い。が、これも、分布領域の周辺地域では、諸相があつて単純でない。その「周辺地域」のひとつと目される天草では、次下のような事態が認められる。

○タツシヤカ。バーサン。バナ。

元氣なおばあさんだよ。《張りきりはあさんのうわさ話》

○キレーカ。ミズジャ。モナン。

きれいな水だものねえ。《井戸水》

下島での実例である。

このようなカ語尾の形容動詞が見られる一方では、ナ語尾形のものもかなりよく観察される。

○ナンカ。キレーナ。カミノ。アツタ。トバナ。

何かきれいな紙があつたんだよ。

○ミヨーナ モンジャ。

妙なものだ。《年寄りの物覚えの悪さをひととりいふかる》

○イマノ シワ ケツコナ モンデ ゴサス バイ。

今の若い人は結構なものでございますよ。《老女の述懐》

これも下島での実例である。上の、「キレーカ」「キレーナ」の例にも見られるように、カ語尾、ナ語尾の出現関係は、語によって、あるいは使用年層によって、必ずしも一定しておらず、やや複雑である。このあたりの状況については、同じ天草下島の深海方言についての、秋山正次氏のご研究に詳しい（『九州方言の基礎的研究』四六三頁）。秋山氏は、語彙研究の立場から、「ナ語尾を基本とする語もたしかに存する。因果ナ・確カナ・憐レナ・馬鹿ナなどは老・少ともにそうであり、無駄ナ・厄介ナなどは少年層においてはカ語尾もまれに存するといった状態である。（中略）少年層においては既に、簡単カ・無理カ・不用心カのようにカ語尾化の傾向の著しいものがあり、老年層においてもこの傾向は存する。」（同書四六三頁）と述べていられる。ここには、両者の複雑な相関の関係が、よく観察されている。この事態は、本来のナ語尾形を庄して、カ語尾形が、新しく進展していったさまを物語っているよう。

秋山正次氏は、上の深海方言について、「残念ナカ」「麥ナカ」「妙ナカ」の例をあげていられる（同書四六〇頁）。これが「ゝナ」の本來形に、新しく「カ」が接して成立した形であることは、容易に想察されよう。この点については、同書において、鏡味明克・上村孝二・瀬戸口俊治・瀬戸口嘉昭氏も、佐賀北山方言および鹿兒島岡兒ヶ水方言について言及していられる（四〇二・五二八頁）。

佐賀では、外に、「ウーバンギヤーナカ」（大番外な・しまりのない・だらしない）「キンナカ」（黄色な）などが見られる。「徒然ナカ」（手もちぶさたな・さみしい）はどうであるうか。県下の武雄市で、  
○ウマゴドン ヒーマゴドンモ オラズー トーゼンニヤー モ  
ンダケーン。

孫も曾孫もおらず、手もちぶさたなものだから。《老翁の述懐》

のような一例を得ている。ここでは、「トーゼンニヤー」のように、イ語尾の形容詞がおこなわれている。こうあれば「徒然ナカ」は、形容動詞「ゝナ・カ」の例としては不適當であろう。ともあれ、上の「ゝナカ」の存在も、形容動詞の世界における、カ語尾形の新しい展開を物語る好例である。

さて、先に掲げた例文にも見られるとおり、「ゝナ」は連体修飾に立つのが一般である。が、「ゝカ」には、連体修飾に立つ用法と共に、

○コカー キレーカ。  
こはきれいだよ。

のように、文末に位置する述部用法のあるのは、すでに指摘したとおりである。これも、「ゝカ」に備わる、体言的陳述性の故であろう。

以上のような天草の状況は、カ語尾地域での古態を示していると考えられる。形容詞の面で、早くカリ活用を盛り立てて例の「カ語尾」を生成するが、この「カ語尾」が、やがて形容動詞の「ゝナ」をも庄して勢力を拡大する。天草では、この新化が、熊本・佐賀な

どの本土部よりも、時間的にずれているとみられる。「いナ」が、本土部に比して、生命力を保持しているのも、当地域における古態を示すひとつの徴表としてよからう。

形容動詞は、いわゆる終止・連体形の「いカ」を軸に、全活用形式が「カリ活用」形式に転じていったと推定される。この活用形式の新化整備にあたっては、カ語尾化の遅速・勢力に応じた、諸相の存することはむろんである。概して言えば、本土部——特に有明海に沿った地域などでは「カリ活用」形式が優勢で、この面では、形容詞との区別を失っている。一方、天草では、古形の「いジャ（ジャル）」形式（「いナ」はこの次元に属する）と新形の「カリ活用」形式とが、ほぼ勢力を二分していると言つてよい状態である。下島の実例を掲げよう。

○ウタノ ジョッズジャツ トー。

歌が上手だよ。《ある老人のうわさ》

○ムカシヤー モー ナンギジャツタ トナン。

昔はもう難儀だったよねえ。《老女が昔の農業を語る》

○ニギヤカジャレバ、

にぎやかであれば、……………。

この類と共に、

○ハナビヤー ソーニ キレーカクッタ ナー。

火花はたいそうきれいだったねえ。

○タツシヤカレバ ヨカバツテー。

達者であればいいけれど。

の類が併存し、いずれも普通におこなわれる。この事態もまた、天

草の形容動詞の、いわゆるカ語尾化の遅れを示していよう。

鹿児島県下になると、カ語尾形容詞が存するにもかかわらず、形容動詞は、「いヂヤ（ヂヤイ、ヂヤツ）」の形をとるのが基本のようである（九州方言の基礎的研究 二四〇・五一四頁参照）。

○シスカジャレバ スンデ ヨカ。

静かなら住んでもいいよ。

阿久根での一例である。カ語尾形容動詞が見られにくいのは、鹿児島が、天草よりも、さらに古い状況を示していると解してよからうか。

さて、カ語尾の、接辞的性格についてはすでにふれた。形容動詞の場合、旧来の、いわゆる終止・連体形のナ語尾が、結構ナ→結構カ、綺麗ナ→綺麗カ などのように、「カ」と、単純に入れかわるということも少なくなかったかと観察されるが、また、状態性の漢語に「カ」が接合して、新しく形容動詞が生成することもあったと思われる。「スマートカ」（スマートだ）「タイヘンカ」（大変だ）「ヨンニューカ」（多い・「ヨンニュー」は副詞「イキヨローカ」（意気揚揚だ）〈以上佐賀例〉）などのような新形が見られるのも、このような「カ」の、接辞的な造語力を示すものであろう。熊本市などでは、「タツシヤカカヒト」（達者な人）「ベツチャカカヒト」（平たい人）のように、「カ」をさらに重ねた例も見い出される。秋山正次氏は、熊本方言について、「新来漢語はB型（旧来の活用とカリ活用との混合〈入筆者注〉）にならず、「愉快カ・高等カ」のようにA型（カリ活用〈入筆者注〉）になる。つまり造語力・生命力はA型にあり、」（『方言学講座』第四巻〈昭三六・東京堂〉二二八頁）と述

べていられる。

## 五

九州西部のカ語尾地域にも、イ語尾の形容詞が認められる。その特殊化された生息状況からしても、これがおおむね残存の事象であることが諒解される。吉町義雄氏は、例えば鹿児島県下の状況について、「カ語尾優勢地域の実態はイ語尾が先行してゐて青年層よりも老人に、町方よりも農家にイ語尾が好まれるからカ語尾化の道を辿つてゐると云へる。」(九州語用言活用分布相要領並補遺)六二頁)と述べていられる。また、秋山正次氏も、天草下島東海岸について、「深海の中心である本郷区では、アリガチャー(有難い)などの形は老人も多くは用いず、カ語尾を用いることが多いのに対して、浅海区(純農村)はイ語尾を使う老人が多い。人々もそれを意識している。(中略) おそらく、浅海区の老年・少年層のイ語尾優勢は、カ語尾浸透以前の、天草郡・深海地方の姿を残すものであると思う。」(九州方言の基礎的研究)四六二頁)と述べていられる。

カ語尾形容詞のなかにおこなわれるイ語尾形容詞は、その用法がかなり特殊化している。熊本市域での例を見よう。

○ズリー。タカシクン、ミヨラス。

ずるい。たかし君、見ている。

小学生男子のものである。ここにおこなわれている「ズリー」は、感情的詠嘆的である。イ語尾形容詞は、このような用法に立つものが多い。

○オレニモ ヤレ ヨー。ワリー。

おれにもくれよ。悪いぞ。

この例文にあつても、「ワリー」には、強い感情が表出されている。風呂の湯かげんを見るべく手をつけて、予想外の熱さに驚いた場合は、「アチー」(熱い。)とあるのが普通のものである。けがをして、その激痛に思わず声をあげる場合も、「イチチャー」(痛い。)とあることが多い。ここに「イタカ」を用いれば、対象を客体視した、いっくらか判断性を帯びた言いかたになるはずである。

○ホーラ ホーラ。アムニャー。

ほらはら。あぶない。(幼女が転びそうになったので、守り

の老女が)

これも情感性の強い言いかたとしてよからう。

○フデー コツ。

大きな話。(話の大きいこと)

ほらを吹いた中年男子が、自分でてれかくしにこう言ったものである。「ナサケニャー コツ。」(情けないこと。)、**「ムゲー コツ。」**(むごいこと。)などもその類例で、みずからの詠嘆表出であるのが一般である。佐賀でもおおむね類似した状況が見られる。

熊本の男子高校生の間にも頻用される言いかたに、「ウストレー。」がある。「てれくさい、気恥ずかしい」ほどの意のものである。例えば教師に叱られてこう言う。これが普通の用法であるが、さらに広い場面でも、これがおこなわれる。スポーツで世界新記録を出した瞬間を、テレビで見ていた高校生が、興奮して思わず、

○ウワー ウストレー。

と叫んだ。「やられた！」とでもいう、劣等の感情が内面を支配してのことであろうか。二階の窓から顔を出していた二、三人の高校生が、下を通る教師を見て、「ウストレー。」と大声をあげたのを聞いたことがある。これは、一見、教師を愚弄するかのようにも見えたが、やはり、瞬間の劣等感情を表出したものと解すべきであろうか。ともあれイ語尾の「ウストレー」が、もはや感動詞とも言える用法をもって、特殊的に存立している点に注意される。

今ひとつ、類例を掲げよう。新調の衣服を身につけたりなどして、こざっぱりと身なりを整えている者を見て、「ムジャンエー。」と感嘆する。「武者のよい・武者ぶりのよい。」ということであろうか。ここでもイ語尾形は感動詞ふうに使われるのがつねで、「ムジャンヨカ」とは、この点、異なっている。

上述のような、残存のイ語尾形容詞の機能について、吉町義雄氏も「薩摩のカ語尾の勝つた地方ではカ語尾が平叙でイ語尾に強意感動ありとする人があり、カ語尾専用地域でも古者は同じ事を感じるらしい。」(九州語用言活用分布相要領並補遺「六二頁」と述べていられる。ほぼ同様な観察は、秋山正次氏の所説『九州方言の基礎的研究』四六一頁)にも見られて、残存のイ語尾形容詞の特殊性が、ここに指摘されるのである。

○オジェー フノ ワリー コー ネー。

たいそう運の悪いことねえ。(天草例)

の「オジェー」のように、イ語尾のまま連用修飾に立つことのあるのも、特殊な生きかたのなかでの、しぜんの慣用とみてよからう。カ語尾地域にあつても、イ語尾形容詞が、いわば共通語意識に基

づいておこなわれることも、むろんある。これは新しい採用にかかわるものであつて、土着の残存形とは区別される。例えば、

○イヌガ コワイ トー。

犬がこわいの。(小学生男子が幼女をいたわって)

熊本市での一例である。こうした平叙の用法に立つものは、おむね新形と解してさしつかえなからう。熊本県南部の佐敷で、ある老人が、

○ソニー オクユキガ ナンカデス ヨー。

たいそう興行きが長いですよ。(山の深さ)

と語って、すぐ「オクユキガ ナガイデス。」と言いかえた。ここにも、内面を支える共通語意識がうかがわれよう。

熊本も、阿蘇などを含む東北部一帯は、九州東半に連なる、イ語尾優勢の地域である。ここでは、例えば山の北、「阿蘇谷」の黒川では、

○アオイタ サンジュノハ バイタ。

青いのは山椒の葉だよ。(老人が、手造りの酢みそを示して)などのようにあつて、イ語尾形容詞が、熊本弁の中に、しぜんの位置を占めている。これは、熊本西部などのカ語尾地域に、残存的に存立するイ語尾形とは異なつて、カ語尾形にとつてかわつた、東からする新形と考えられる。福岡県西南部のカ・イ語尾併用地域などでは、東部からするイ語尾の勢力におされて、カ語尾が残存状態を示し、「カは感嘆、感動を表す。パトスの表現であり、イは平静普通な状態のエートスの表現である(吉町義雄氏前掲論文六一頁)」の注意される。ここでは、逆に古態となるカ語尾が、特殊化して存

立しているのである。

## 六

カ語尾形容詞のおこなわれる九州西部地域では、また、いわゆるサ語尾の形容詞が、特殊におこなわれている。

○メーノ ハヤサー。

目の早いこと。《幼女が早くも菓子を見つけたので、老女が

あきれて》

○アヨー オトロシサー。

ああこわいこと。《筆者が方言研究に來たことを知って、老女が》

佐賀および天草での実例である。「くサ」は、このように、感動・詠嘆の表現におこなわれるのが一定的である。

○オー コノ スクサ ヨ。

おお、この温かいことよ。《ストーブの燃えている部屋へ入って、中年男子が》

熊本での一例である。このように文末詞「ヨ」を伴うことも少なくない。

○コジョーシヤノ オーサ オーサ。

故障車の多いこと多いこと。《中年の運転手》

○イッタサモ イッタサ。

痛いこと痛いこと。《けがをした中年婦人》

熊本および天草での実例である。このように、二回重ねておこなわれることもあって盛んである。

さて、このようなサ語尾の形容詞は、今日、南島に著しい同形の語と、系統的な関連をもつものではないか。南島諸島の形容詞が、「サ語尾」にかかわる特定形式を示すものであることは周知のとおりである。例えば沖繩首里方言について、平山輝男氏は「首里方言も、他の沖繩群島の諸方言と同じように「さあり」系の活用を示す。」とされ、終止形として

Panu jama'a takasa'n (あの山は高い)

などの例文を掲げて「takasa'n」の構成は、「高さあるもの」が融合変化したものである。」と説明していられる。『琉球方言の総合的研究』(昭四一・明治書院)二六八頁参照。北にあがって、奄美大島など、カ語尾・サ語尾両形が併存する地域での存立状況について、瀬戸口俊治氏は、「大島名瀬の町部では、わずかながらへか語尾形がきかれたが、土地人もへさ語尾形が古く、へか語尾形は新しいと説明していた。」(薩隅地方方言の方言地理学的研究——へい語尾へか語尾へさ語尾形容詞の分布とその解釈——)『へ比治山女子短期大学紀要創刊号』五六頁)と述べて、サ語尾形の古さを認めようとしていられる。このような状況からすれば、かつて九州西部でも、南島同様、サ語尾形容詞の、普通におこなわれていた時期があるのではないか。それが、新形としてのイ語尾・カ語尾形におされて、現在では、特殊な残存を示すに過ぎなくなっているのかも想像される。こうであるとするれば、この面からも、南島と九州西部との、つながりの深さが指摘される。

先にとりあげたとおり、カ語尾形のなかの残存のイ語尾形容詞が、情感性の濃い、特殊ないとなみを見せているが、サ語尾形もまた同

様に、強い情感性をもって存立している。この点、両者とも、類似の方向をたどったかと興味深い。が、両者の表現性には、もとより差異も認められる。イ語尾形に、やや屈折した意識に密着した、生まなましさがあるのに対して、サ語尾形には、感動・詠嘆の深さがある。この差異は、「i」「a」の音相の差にも基づいていようが、同時に、「サ」に認められる体言性が、大きくかわわって、いよう。カ語尾形容詞本位の世界で、すでに叙述力の衰微した残存のイ語尾・サ語尾形が、特殊な感情に支えられて、叙述性・伝達性よりも、局限された表出性をもって、わずかに息づいている事態が注目される。

## む す び

以上、九州西部地域に分布するカ語尾形容詞を中心に、形容語の存立状態について記述した。この、特異なカ語尾形が、今日、当地域に限って存立する事態は、注目に値いしよう。とりわけ注意されるのは、カ語尾形が、体言性を帯びている点である。このことは、当方言の根底的な基質と、深く関連しあった事実と考えられる。

さて、このカ語尾形は、今日でも強い生命力を維持していて、局所においては、なお勢力を拡大しつつある。鹿児島・宮崎などのカ語尾併用地域では、少年層にカ語尾形が増加しているという。「九州方言の基礎的研究」二四一・二五二頁。熊本県下の阿蘇地域でも、イ語尾形の中にカ語尾が受け入れられつつある。国語の、イ語尾形容詞へ赴く大勢の中で、方处的な現象ながら、カ語尾形がこのような活動力を見せるのは、重要な事実である。このような動

きの中に、国語の根本的な法則をかいまみることができるようになる。

(兵庫教育大学教授)